

氏名(本籍)	三輪修嗣(福島県)
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博甲第1,742号
学位授与年月日	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	健常人の精神的及び身体的健康状態を規定する要因に関する心身医学的研究
主査	筑波大学教授 医学博士 村上正孝
副査	筑波大学教授 薬学博士 下條信弘
副査	筑波大学教授 医学博士 庄司進一
副査	筑波大学教授 医学博士 田中直見
副査	筑波大学助教授 医学博士 戸村成男

論文の内容の要旨

(目的)

ストレス社会と言われる現代、疾病のないいわゆる「健常人」集団においても、不定愁訴や抑うつなど、ストレス性の心身の変調に悩む人の数は決して少なくないと予想される。

そこで、健常人における心身の症状の程度や質を左右する、性格や行動上の特性について明らかにし、ストレス性の症状の発生メカニズムについて考察することを目的として研究に着手した。又、心身医学領域の研究で従来対象とされることが少なかった、農村住民を対象とすることで新しいデータを提供することを意図した。

(対象と方法)

農村の健診受診者のうち、疾病を持たない者を面接により選別し、以下の項目からなる調査を行った。

1. 身体検査:身長, 体重, 血圧
2. 血液検査:血算, 血液生化学, ビタミンB6, β -カロチン, 過酸化脂質, リンパ球表面マーカー, NK細胞活性
3. 心身の健康状態: SDS (抑うつ尺度), QOL 質問表 (身体愁訴を含む総合的な健康状態の尺度)
4. 日常苛立ち事尺度 (ストレッサーの尺度)
5. 生活習慣に関する質問項目
6. 性格・行動パターンに関する質問紙: SSPI (性格検査), Health Locus of Control 尺度 (健康行動の特徴の評価法), A型傾向判別票 (タイプA行動パターンの尺度), MMPIアレキシシミアスケール (心身症的な心理特性であるアレキシシミアの尺度)

以上の項目に有効なデータの得られた108名(男性54名, 女性54名)を解析の対象とし、統計学的検討(群間比較, 単回帰分析, 重回帰分析)を行った。タイプAに関しては、その構成要素についての検討が重要であるとされているため、主成分分析により構成要素を抽出し、得られた4因子についての因子得点を後の分析に用いた。

(結果)

対象集団におけるアレキシシミア得点の平均値は、健常集団における数字としては従来にない高い値であり、

むしろ疾病群の数字に近いものであった。また、好ましい生活習慣を持つ者ほどアレキシミア傾向が高いという結果が得られた。

NK細胞活性により対象を3分して比較した結果、高活性群の特徴として、低い抑うつ状態、高いQOLと高い社会参加・支援がみられた。

精神愁訴の量（抑うつ度）と身体愁訴の量とを目的変数とした重回帰分析では、精神愁訴を増やす要因として、外的統制傾向（Health Locus of Control）、日常苛立ち事、タイプAのうちの「過敏性」が重要であることが示唆された。また、女性においてタイプAの「熱中性」は抑うつを抑制することがわかった。

身体愁訴を増やす要因として、肥満、タイプAのうちの「攻撃性」、神経質性格が重要であることがわかった。
（考察）

対象集団のアレキシミア得点が従来の報告に比べ高値を示し、アレキシミアが農村住民に特徴的な傾向であることが予想された。これは、農民の特徴についての文化人類学的な知見とも一致する結果である。

心身症的な心理特性であるアレキシミアが好ましい生活習慣と関連することがわかり、これはアレキシミアにおける過剰適応傾向が健康行動に反映されていると考えた。

NK細胞活性は、抑うつとの関連だけでなく、社会的な満足などを含めた、より総合的な健康度と関連をもつことがわかった。

精神愁訴の発現には外的な統制傾向が重要であるという結果が得られ、ここには自己の行動に対する認知パターンが関与していると考えた。

タイプA研究において注目されている症状抑制の問題に関して、タイプAの構成要素のうちの熱中性が重要であるという知見が確かめられ、これはうつ病発症の状況における要因についての従来の議論と対比して論じた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は健康人の集団を対象として、ストレス性の心身の変調の発生のメカニズムを心身医学的研究手法を用いて明らかにし、地域住民の効果的な健康管理対策に資する目的で行われた画期的なものである。単年度のデータの解析であり、得られた結果で目新しい成果は少ないが、対象となった農村住民が、心身症的な心理特性であるアレキシミア傾向が高く、しかも好ましい生活習慣をもつ者が多いなど、従来この種の調査で農村住民の特性として指摘されたことのない新たな知見を見出した。その他、精神的愁訴を増やす要因として、健康意識の外的統制傾向、日常苛立ち事、タイプAのうちの「過敏性」などが大きく寄与し、身体的愁訴には肥満、タイプAのうちの「攻撃性」神経質的性格が重要であることなどが示唆された。これらの結果は住民の健康管理にとって、精神・身体的愁訴のケアのみならず、その背景となっている要因を探り出し指導することが重要であることを浮き彫りにした。

本研究・調査結果は、今後継続的に実施される本調査の解析方針をたてるに当たって、きわめて有効な基盤を与えたものと評価される。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。